

2023 全道合研 第1分科会「国語教育」 報告

11/11 (土) 13:00~17:00 Zoom によるオンライン開催 参加者 11 名

*報告されたレポートは以下の9本である。今回は初めて参加される方も多く、多彩なレポートともに充実した討議となった。ここでは、発表順ではなく、レポートの内容をふまえた順で紹介していきたい。

表現・作文——言語表現の新たな可能性を求めて

例年は小学校からのレポートが多いが、今年は高校・大学から、非常に興味深い内容の報告があった。

(1)働く人にインタビュー

田和輝起 (鹿追高等学校)

3年生の「国語表現」における実践報告。各自の進路希望に応じ、インタビュー相手を探してインタビューを行い、それをレポートにまとめるというシンプルなものながら、生徒がまとめあげたレポートの質の高さに驚嘆。とりわけ、イラストレーターにインタビューしたレポートでは、単に質問と回答を羅列するのではなく、イラストを交えた紙面そのものから、イラストレーターの人となりが見えてきた。生徒はSNSを駆使してインタビュー相手を探してきたようだが、これも授業における新しいITの活用法のひとつではないだろうか。「聞き書き」などにも発展させる可能性を秘めた報告であった。

(2)「日本語表現」指導についてⅡ

東谷一彦 (札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科)

昨年に引き続いて、短期大学での「日本語表現」に関わる講座の報告。今年は1年後期の「ことばの力」の講義内容が紹介されているが、生徒の国語力や興味関心に報告の重点があった昨年と大きく異なり、今年は「絵本の読み聞かせ」とあわせて、「書評」という新たなジャンルへの取り組みが、学生のすぐれた作品とともに紹介されており、興味が尽きない。特に「書評」は、読み手に「ネタバレ」を起こさないようにしながら、いかに内容の本質を伝えるかという点で、単なる感想を超えた、あらたな言語活動の可能性を示しており、小中高でも工夫次第で取り組めると、参加者から共感の声があがった。

文学教育——子どもたちとともに、ことばと徹底的に向き合わねば、本当の国語の力は育たない

小学校4本、高校1本。いずれも精緻な教材研究の上で、子どもたちとともにことばと徹底的に向き合う授業実践の報告であり、表面上の言語活動でお茶を濁す学習指導要領に抗する授業の構築の必要性を、参加者で共通認識として持つことができたのが、大きな収穫である。

(3)「たぬき」のように元気な1年生とともに、「たぬきの糸車」の深い意味を考える

(4)教育実習生とともに『きつねの窓』の『関係と関係の関係』の展開を分析し授業化する

齋藤鉄也 (全釧路教職員組合)

時間の関係で、2本まとめた報告。「たぬきの糸車」は、小学1年生といえども、丁寧に表現をよみ進めていくことで、表現の深層を子どもたちと共有できることを実感させてくれる貴重な記録である。「きつねの窓」は小学校6年生の実践であるが、「国語をなめていました」という教育実習生が、齋藤氏の指導の下で表現の深層に迫る教材研究を丁寧にを行い、それをもとに授業することで、作品のよみを深めていく。このような過程を通して、実習生も国語の奥深さと、指導の楽しさを実感していく。学習指導要領に忠実な、教師用指導書に従った「言語活動」では、教師も子どもたちも、国語のおもしろみさえ実感できないということを、実践を通して明らかにしてくれている。

(5)「すぐれた表現の効果」を手がかりに「川とノリオ」の思想に迫る 齋藤鉄也 (全釧路教職員組合)

この名作の授業は、一步間違うと教科書のタイトル通りに、「すぐれた表現」探しに終始しがちになる。齋藤氏はそこにとどまらず、「戦争平和教材における美と真実の体験、認識」「自然形象と人物形象を関連づける」「片仮名表記『ヒロシマ』『ノリオ』の意味づけ」「散文叙事詩としての表現の効果と味わい」などを子どもたちとともによみ解くことを目標に、緻密な教材研究のもと、時間をかけて丁寧によ

み進めていく。その過程は資料として提示された板書の写真に見事に見て取ることができる。子どもたちはこの作品の主題、思想を自らつかみとることに、授業を進めるごとに一步步、確実に近づいていく。その手法は、小学校のみならずすべての校種の授業で手本とすべきものである。

(6)読解力とは何か 「きつねのおきゃくさま」を通して考える 市来 健(檜山教職員組合)

改悪学習指導要領のもとで「物語文の読み取りそれ自体が子どもたちの財産であると私は確信しているが、物語文がその他の目的のための手段に貶められてしまっている現状が、私は悔しくてならない」という市来氏。「国語科は、『読む力をつける』教科です。でも、国語・文学作品は『読む力をつけるための手段』ではない」「文学作品は、読むことそれ自体が、人を人として育てます！ 他者の人生を疑似体験し、人間認識・社会認識を育てます！」とのメッセージを、そのまま具現化した小学2年生の授業実践報告。紙黒板という昔ながらの手法で、ひとつひとつのことばに立ち止まりながら、まさに「子どもたちの財産」となるような丁寧な授業をすすめていく。安直な「言語活動」でお茶を濁す現在の国語教育の在り方が間違いであることを立証しうる、見事な実践である。

(7)「文学国語」の逆襲 葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」の授業から 池田和彦(深川西高等学校)

改悪学習指導要領のもと、文学を学ばないまま高校を卒業する生徒の存在が、現実のものとなった。本当の意味での実用的な国語力とは、改悪学習指導要領が示すような皮相なものではない。選択科目ながら「文学国語」を学ぶ生徒に、「小説」という語の由来、文学を学ぶ意味などを授業開きで話し、名作「セメント樽の中の手紙」を、時間をかけてよみ進める。最後に提出された感想の中には、授業者も予想しなかった思わぬ発見が盛りだくさん。教科書通りでは「文学国語」の授業も、ただ小説を読んだだけで終わりになりそうだが、その自主的再編成の方向も本レポートで提示された。

国語教育の可能性——ことばを通して、社会に目を向ける主権者教育へ

高校から2本のレポート。単なる「話す聞く」「読む」「書く」にとどまらない、主権者教育としての国語教育の可能性を大いに示してくれるものであった。

(8)国語で「民主主義」を探究する 評論『政治の基本は民主主義』をめぐって

大澤信哉(岩見沢西高等学校)

前年度南幌高校での実践を携えて今年の全国教研に参加された大澤氏が、その実践を岩見沢西高で再検証する。3年生の選択授業で、山口二郎の評論『政治の基本は民主主義』をとりあげた上で、自分が住む自治体の現状や統一地方選挙の各候補者の公約を調べさせる。さらには女性の政治参加や若者の政治参加(投票率)についての考えを述べさせるなどの取り組みが紹介された。岩見沢市には女性の市議会議員がいない、またそれをさほど問題視していない議員の発言などが、生徒の調査を通じて紹介された。「国語科の学習を通じての主権者教育」の重要性を大澤氏は力説するが、その重要性に耳を傾けなかったという一部の全国教研傍聴者は、先ほどの議員と「同罪」であろう。

(9)古典から現代社会を見つめ直そう ～日本はジェンダー平等？～

中川望都子(帯広南商業高等学校)

『徒然草』第184段、北条時頼の母(松下禅尼)に関する逸話の末尾近くに「女性なれども聖人の心に通へり」とある。これを古い時代の男尊女卑の発想と片づけずに、現代社会の中にこびりつく女性差別や蔑視の実例を、さまざまな実体験や日常のことばのなかから拾い集め、各自の感想を書かせるという授業につなげている。女性のみでの授業ということもあり、非常に活発な意見が出されたようだ。ジェンダー差別の問題を現代史の中から掘り起こし、単に女性側だけでなく、男性が「男らしさ」を求められること、さらには「高校生」が「高校生らしさ」を求められることを否定するところまで、生徒とともにたどり着いているのは、見事というよりない。(文責:池田和彦)